ないという考え方である。つまり〝人間〟とはっきり一線を画していたわけである。

日本の場合は違っていた。「日本の霊長類研究者は、サルの行動を調べるのに、相手を擬人化し、人間といわば同列においているんですよね。西欧では、動物に人間的な意味をもたせる用語を使った論文はタブーのようになっていた」と、パメラさんは言う。

来日してまもなく、パメラさんは首をかしげるような現場にでくわした。

愛知県犬山市にある京大霊長類研究所を訪れたとき、サルの供養がおこなわれたのである。

「研究の対象になっていたサルが死んでしまうと、みんなでていねいに葬ってやるんですね。〝死なせてしまってゴメンナサイ〟とか、〝長い間、私たちのために役立ってくれてアリガトウ〟という気持ちをもっている。サルにも心があって、その霊をなぐさめる――このような擬人化の観念は、西欧の研究者にはないものです」。

サル供養ばかりではない。日本人の社会では、針供養、茶筅供養、筆供養なども行なわれて、塚まで建てられていることに彼女はおどろいた。人間とかかわりをもった〝もの〟、〝道具〟にまで霊のイメージをいだき、信じる背景はいったいどこからきているのだろうか――と。これを追跡してみることが、日本の霊長類研究の際立った特徴を把握することになるかもしれないと、彼女は思う。

哲学・心理学者でもあるパメラさんは、霊長研グループの応援を得ながら、日本人の思想・文化に大きな影響をあたえた人々の著作を読みあさった。西田幾太郎、長谷川如是閑の先人たちのものから、現在活躍している文化人類学、生物社会学者の文献も……。もちろん、サルのいる〝現場〟にも、精力的に足を運んだ。

来日してから一年余りの間に、パメラさんは時間の許すかぎり、ニホンザルとの〝対面〟を求めて各地を飛び回った。大阪府箕面市、京都嵐山に始まって、長野県志賀高原の地獄谷、宮崎県幸島、大分県高崎山、兵庫県淡路島、鹿児島県屋久島……。これらの地域は、一九四八年いらい、京大霊長類研究グループを中心とする日本の学者たちが長期にわたってサルたちを観察し続けた〝聖域〟である。

餌づけから個体の識別にはじまった日本の研究は、やがてボスザルにひきいられ、集団ごと行動する〝群れ行動〟の記録、ボスを筆頭に順位が整然としているサル社会の秩序構造などをつぎつぎと明らかにしていった。また、イモを洗って食べたり、ムギを水に浸して食べるなど、サルたちが新しい生活文化を獲得し、仲間に伝播してゆくようすも、三十年前に記録されている。

「霊長類の社会的行動も、まだまだ複雑で、一般的な理論として成り立っていません。しかし、サルの社会性や、その他の疑問を解くには、日本のような長期的な研究が必要かつ大事であるということが西欧の研究者の間で認識されだしてきました。いずれにしても、科学においてひとつの問題を模索する場合、その解決にいろいろな方法があるということを知ることが大切です。日本の〝サル学〟は霊長類の行動そのものの知識を西欧の学者たちに与えたばかりでなく、科学に対しても主観的な意見を応用すべきだということを教えています」と、パメラさんは語る。

パメラさんは、秋には『霊長類学の行くえ』と題したレポートをまとめるという。

（サンケイ新聞大阪本社文化部次長）

テッド・マクニーリー

アイスホッケーの最優秀外人選手

ハーブ・若林

一九七九年、西武鉄道アイスホッケー・チームは、外人選手を二名入れることになった。誰にするかは、監督である私に任された。私は以前、テッドに会ったことがあり、アイスホッケー選手として優秀なばかりか、人間的にも大変すぐれていることに感銘を受けていた。テッドは当時、シニア・ウエスタン・リーグのスポケーン・フライヤーズで選手兼コーチをやっており、日本へはとても来れそうになかったが、思いきって交渉してみると、意外にすんなりと引き受けてくれた。

テッド・マクニーリーは、一九五〇年十一月七日、ブリティッシュ・コロンビア州クランブルックに生まれた。小さい頃からアイスホッケーに興じ、二十五歳から四年間はエドモントンの実業チームで活躍。その後アメリカに招かれ、ナショナル・リーグでも好成績をあげた。

私がテッドの試合ぶりを初めて目にしたのは、彼がカナダに帰って三年後の七七―七八年シーズンだった。スポケーン・フライヤーズの選手として日本のナショナル・チームとの試合で示したテッドのプレーに、私はゾクゾク興奮したのを覚えている。いつの日か西武

右がマクニーリーさん